「 私の人生は、

とても有意義に暮らせました 」

　のんびりとした性格でしたから、却ってそれが良かったのかもしれません。いい友達に恵まれました。本当にそう思います。暖かな方々に巡り合えたのが、私の宝物です。お金はたくさんではありませんが、二人で働いたこと、裕さんが頑張ってくれたこと、子どもたちが贅沢ではなかったことが幸いしました。私は幸せに暮らせました。感謝しています。」

清美はそう言って亡くなりました。これからも家族はみなさまにお世話になります。

2019.1.10細野裕

大好きな清美さんのことを少し語らせてください

　亡くなる2時間前にアイスキャンデイを食べていた。

1/2困10:30

居間のソファーに座っている。アイスキャンデイが食べたいというので、一本

ペロリと平らげた。その後30分ほどたった時、苦しいという。どうして欲しいのと聞くと、看護師を呼んでほしいという。そこで連絡を取ると5分余りで来てくれた。

※半年前に病院の医師からどのように終末ケアを受けたいのか、病院か自宅かと訪ねられて、自宅でと二人で決めていた。その後12月に入って主治医、看護師、ケアマネ、包括支援センターと支援グループ体制ができていた。

看護師は、主治医を呼びましょうと言って主治医を呼んでくれた。錠剤を一粒、これを飲むと12時間後に楽になりますよ、さらに胸にパッチを貼ってくれた。これは24時間後くらいには楽になりますよといってケアしてくれた。玄関で主治医にどのくらい持ちますか?と聞いた。4〜5日かなあと言ってくれた。

それでそろそろあっちこっちに連絡を入れないといけないなと思った。

主治医が帰って、入れ替わりに高木英俊家族がやってきてくれた。体をさすったり、なでたりしてくれたケアがありがたかった。

12:45くらいだろうか、清美はうつらうつらし始めた。薬が効き始めたと思った。清美さん、清美さんとの問いかけに目を開けたり、閉じたりの反応だった。なんだか三途の川を渡り始めているような気配を感じてしまった。

指の爪が紫色になったり、手の甲が黄色くなったりした。また、戻った。

少し大きく息をした次の瞬間、頭を少しカクっとした。、たまたま握っていた手を滑らして、脈をとった。なかった。酸素吸入器を鼻から外して、有紀に息をみてもらった。息がなかった。

「清美さん、死んじゃったの?」って声をかけた。

清美さん「うん、死んじゃった」って答えた。

有紀、今何時?　1時かな　！いや、1時1分…これが清美の臨終となった。

1/1の夜21:00〜23:00清美さんと3時間話をしたこと

　清美が、ここ2〜3日眠れないんだ、夜が長くてつらいという。今日は、元旦。話をしようと話だした。

「面白い話して！」面白い話をした。

次に

「なんか思い出話をして！」と言う。

「そうだなあ、思い出話って言ったって55年もの時間を語塑切れないよね。」

※清美さんとは中学2年生で学級開きのひに目に留まった少女だったから、55年。

そこで、この1年間位を話題にした。

船に揺られて1週間も小笠原に行ったことが始まりだった。小笠原には、二人の知り合いがいる。

一人は、こどもの国時代に仲間だった女性、小笠原の学校の先生だった。

もう一人は、海神というホウェールウォッチングを経営している人の奥さん。ヨット愛好家、この人を知らない人はいない。世界の人物。1週間は短かった。帰宅して疲れたけど興奮して友達に小笠原に行ったことを報告したと聞いた。そこから始まって、乗鞍に行って車中泊したこと、大阪の22年来の友人、京都に行ってゆたかさんが長く付き合ってきた京都の旅館の女将、タクシー会社の社長、30年来の友禅染の職人夫妻に会ったこと。飛んで12月にはヴェラシス浦賀の自治会のクリスマス会、ギタリストと語り合えたこと、12月23,24日には甲府に行って従兄妹たちに会い、お別れを言えたこと、トマト農園を見てトマトを食べたこと、その経営者にあったことを語り合えた。

そんな話が終わって、質問した。

清美さんの人生はいかがでしたか?

「充実してましたね。」

なんでそんな風に言えるの?

「いい友達、いい知人たちがたくさんできましたよ。」

それは素晴らしいねえ。よかったねえ。嬉しいねえ。

すると清美さん、

「私がいなくなったらゆたかさんが嫌なことは何?」

ヨークマートにネギ、一緒に買いに行けなくなるねえ。

※私は、シンボリックな話をしたまで。一緒に肩を並べて歩けなくなる、あと10年元気なら、あっちこっちに行けたり、近所を散歩できる、それが幸せの中身だと思うから。

「ごめんね、ゆたかさん」

あとは、通帳の話、キャッシュカードの話、財産贈与や遺言書の話だった。

そろそろ寝ましょうか?清美さん

※　清美さんが亡くなった後、1/4くらくいに有紀が清美さんの小学校6年生の時の卒業文集、ガリ版刷りのB5版、引っ張り出して見せてくれた。

書かれたテーマは、友達だった。いつまでもいつまでも、としめくられていた。今、亡くなって「友達」で締めくくる、小学生卒業文集は書かせるものである、日本経悔いの文化だと思うほどだ。ふむふむである。感慨深い。

がん宜告受けてよかったこと

この2年間で準備ができた。

①自分が死んだらこの人へ連絡をしてくれリストが作成されていたこと。

②通帳をはじめとして相続、キャッシュカード、銀行関係の状況が説明されて、困らないようになっていたこと。

③仏壇を一緒に買いに行けたこと。

④お墓や死生観について十分に語り合えたこと

⑤ゆっくりと話ができたこと。

⑥会いたい友達、会える友達には会えていること。ランチをしたり、出席すべきところには大方、出席してご挨拶してきていること。

⑦私を含めて家族がそれなりにお別れの覚悟ができてきたこと孫にとっての情操教育

⑧行っておきたいところ、会っておきたい人にはおおよそ会えたこと

1/3(月)有紀が金庫に入っていたと出してきたものを見た

『クラフト封筒にゆたかさんへと筆ペンで書かれていた。これは、有紀さんへ、弥さんへ、(弥の妻)里恵さんへ珠希へ、陸へと7人に対しての手紙だった。ゆたかさんへ2018年10月と記されていた。陸には、立派な印鑑が入っていた。清美さんが調停委員で使った実印、立派なものだった。これを使うときが来るという前提で5 歳の陸に譲ったものだ。

なかなかしゃれたことを清美さんは残していったものだと思った。

これから

①ご飯を一人で作って食べることができること

②洗濯は洗って干して畳んでしまうが自分でできるので合格

③ゴミは、捨てるものが玄関に置いてあるのでそれを持っていけぼいいようになっているが、何日に何をが頭に入っていないので、ちゃんとできるようにすること

④お金の出し入れが、できるようになること

・月払い(食費とか)

・年払い(保険とか)

⑤季節になったら衣替えができる'

⑥娘の有紀や息子の弥と楽しくやること

⑦仕事を辞めてからのことを積み上げること

　ご飯、一人で食べるの、寂しそう

　ねえねえ、これ見てって言ってもそばに誰もいてくれないね

奥さん亡くすとストレスたまってあと追って死んじゃうってよく人が言う。奥さん亡くした人は、なんか変わってしまうと言われる(行動が行動的でなくなると)ゆたかさん

前見て生きてく

悲しいけど深く悲しいけど

未知なる経験していく

独りになるのは初めて父母と暮らしていた働いて下宿した友達と二人だった。

それで清美さんと結婚。

今は、娘の有紀がいてくれるけど喧嘩して憎たらしいと思うけど、支えてくれてる娘の有紀がありがたい感謝している。

香典の整理も官公庁に出す書類も調べて一緒に窓口行ってくれて、

これからはお礼状書きお菓子送る準備

荷物整理毘沙門暮らしは5年後まで

さてとその先はよくわかりません

ここから清美が私宛に書いた手紙です

ゆたかさんへ

改めて手紙というのは難しい(笑)そのぐらい私たちの歴史はありますね。

14歳で初めて出会って。56年。結婚したのは24歳だからすでに結婚歴も45年と半年

近く。今さら思い幾を語っても仕方ない。それは二人がわかっていること。

この手紙は私の発病からの感謝の最後の手紙となります。

早く発見できずにごめんなさい。皆に沢山の心配と迷惑をかけてしまいました。

癌になるにしてもあと数年後ぐらいになんて思ったりしたこともあります。

調停員の仕事も最後まで元気に全うし、人権擁護委員もあと一期ぐらいできて、・なんて。

　いきなりのステージ3の告知。でも不思議なぐらい私もあなたも落ち着いて受け止められ

ましたね。以来、まあ癌を抱えながらですけど普通に生活できてきたことが何より嬉しいで

す。元気づけてくれてほんとにありがとう。

一緒に行動してくれてありがとう。

私に『感謝してるよ』と何回も首ってくれて嬉しかったです

共白髪になるまで。可愛いおじいさんおばあさんを目指していたけど、それがちょっとかなわなかったね。残念です。

これから一人暮らしになってしばらくは大変でしょうがあなたのことです。テキパキといろいろなことを処理していくことでしょう。後のことはよろしくね。

あなたは多分長生きするでしょうけど、周りに愛されるおじいさんになってください。

素直な気持ちでいろいろ受け止めてね。

私という緩衝材?がいなくなるのです。そういう意味で女性の存在は大きいかな(笑)

これからのあなたの人生がますます充実しますことを天から見守っています。

頑張ってね!!

これは息子の弥へ

書いたものです

今思うことは人生終わりよければすべて良しということです。

弥は言いました。19歳で家を出てしまっ允ので、親が何をしてき充かわからないと。そうなんだよね。親のことって知っているようで知らないよね。

細野のお母さんの介護が終わったのが45歳。それから私がやったのは女性たちで立ち上げたrたすけあい横須賀」の活動。事務局をやりながら、活動もし、会長職も務めたわ。一番油の乗った活動期。1で運転免許をとって活動範囲も広がってや夢がいをおおいに感じたたすけあいの活動。

そんななか、かつて中学校のPTAでご一緒した加藤恵子さんという方から声がかかりその方が今やっている家事調停委員を細野さんも挑戦してみないかとお誘いがあったのが56歳のとき。そういうのがあることは以前から知っていたけど、そういうのは元校長、みたいな人がやるものだと思っていた。

でも加藤さんは言ったの。細野さんは地域で活動しPTAもいろいろ活躍し、ご老入の介護の体験もあるnそういう入こそいろいろな人の気持ちがわかると思うよ。推薦するから試験受けてみない?と。まさか私にこんなチャンスが巡ってくるとは。よし、駄目元で挑戦してみようと。

志望動機を書いたものともちろん履歴書を出し、試験に臨んだ。横浜の本庁では与えられた新聞記事を読んで自由に霞分の意見を記述するものだった。

そのあと裁判官とか弁護士とか裁判所関係者が5人ぐらい並んでいる前で面接。一人ずつ質問があり。これに落ちたってどうというわけでもないし、割と落ち着いて答えていたと思う。

で結果採用。横須賀支部に配属され。蒼々たる仲間の中にはいったわけよ。私みたいな一主婦が!(もっともお父さんが現職の校長というバックグラウンドもあったでしょうね。何しろ裁判所は身元が大事だから)それから研修、勉強で実際の調停に入っていった。

目の前で繰り広げられる人生ドラマ、知らなかっな世界。でもリアル。勉強になった。14年も経った。良き仲間、友人ができた。3年目のときよもやの肺がん宣告。いきなりステージ3の進行がん。

でも私もお父さんもしっかり受け止められたわ。そんなに慌てなくて。

　何だろうね。癌体質はわかっていた。でも何の兆候もなく。元気で動き回っていたのにと思う。ただ昔と違って現在は癌イコール死とはすぐに結びつかないぐらいにはなっているし二人に一人は癌になると言われている。治療をしてやってみるしかないなという気持ちでした。

それからのことはわかるよね。